

第5章 結 語

1 日向洞窟遺跡西地区縄文時代草創期石器群の調査・研究成果

(1) 石器の分布状況

西地区出土の縄文草創期石器の分布状況を検討した結果、少なくとも4つのブロックが存在したことが判明した (Fig.33)。これを発掘調査時に検出された遺構などと比較すると、ブロック1には剥片集中地点とデポ状出土地点が各1ヶ所含まれている。ブロック2には剥片集中地点が2ヶ所とデポ状出土地点が1ヶ所含まれている。ブロック3には大形堅穴状遺構が含まれている。ブロック4には剥片集中地点とデポ状出土地点が1ヶ所ずつ含まれている。4つのブロックでは各種の石器の製作が、大きな偏在性をもたずに行われていた。

こうした状況から見て、同様の石器製作址は、日向洞窟遺跡から大谷地と称する低湿地帯に向かって突き出た半島状の地形の裾野に沿って点在していると推定される。また、大形堅穴状遺構のように露天の住居の可能性がある遺構にも十分注意を払う必要がある。洞窟遺跡だけが恒常的な居住空間ではなかったからである。

(2) 石器製作の技術基盤

西地区では石核がほとんどなく、エンドスクレイパーや石鏃未製品に残されたポイントフレイク素材特有の剥離痕跡が目立っていることから、小形剥片石器の製作においては、槍先形尖頭器の製作で生じる両面調整剥片を素材とする技術基盤が存在していたことが判明した。

大形ブランクから未製品を含む槍先形尖頭器までの両面調整石器の剥離は、作業内容1から4までに細分され、小形剥片石器の素材になる剥片は、作業内容①と②で生ずるやや大振りなものである (Fig.103~105)。自然面を有する剥片が少ないことは、原石から大形ブランクへの粗加工が、西地区外で行われていたことを示すものである。

(3) 西地区の年代

西地区の土器片は、Ⅵ層の土に固着した状態で出土したことから、取り上げが困難を極めたという。それらによれば、微隆起線文土器を主体とし、粘土紐に刻みを加える細隆起線文土器と爪形文土器も若干見られる。大枠としては、土器編年Ⅱb期に位置づ

けて大過ないであろう。機会があれば、熱ルミネッセンス法による年代測定を試みたい。

日向洞窟遺跡では以上の型式の土器片に加えて、口縁部に細隆起線文と胴部に微隆起線文を有する土器片、多縄文 (押圧縄文) 土器も出土している。これらの型式がどのような比率で存在し、どれが優勢であったのかという問題は、将来の発掘調査で解決しなければならない。

2 西地区石器群の東日本での位置づけ

東北地方の当該期の石器群については、石器段階1~3に区分しており、鈴木雅氏が「第4章考察の1」で詳述している。石器段階1の石刃技術と段階2の有舌尖頭器は、東北地方では顕在化したものではなかった。石器段階1・2の東北地方においては、槍先形尖頭器の製作が小形剥片石器の素材供給の上で、最も重要な技術基盤であったのである。帯広市大正3遺跡に見られるように、爪形文土器を伴う本州の草創期文化は、石器段階3初頭に北海道へ拡散していた。この点も、非常に重要な検討課題である。

とくに、東北地方とその周辺における縄文時代草創期土器・石器群の変遷を明快に示すべく、Fig.106・107を作成した。佐川と鈴木氏が幾度も議論を重ね、改訂を重ねた結果であるが、今なお満足してはいない。

「第4章考察の1」は、鈴木氏が東北学院大学へ提出した修士論文の中核をなす部分であり、今後より充実を図って、個人論文として公表する予定である。

3 今後の調査・研究計画

(1) ブロック内の石器製作の実態を探る

まず、西地区で検出された4つの石器ブロックのうちの1つのブロックを選択する。今回調査した槍先形尖頭器の大形ブランクや未製品を含む各種ツールについて、母岩の分類を行い、それらの接合作業を行う。つぎに、その石器ブロックから出土したすべての剥片を抽出し、石材や母岩の分類を行う。そして、剥片の接合作業を行う。その上で、各種ツールの成果と剥片の成果の付き合わせ作業を行う。

以上の作業を地道に蓄積すれば、槍先形尖頭器製作の作業内容①・②で作出された剥片が、石器に仕上げられる実際の過程をより明確にすることができると考える。

なお、発掘調査では、Ⅵ層の土を土嚢袋で持ち帰り、その数は第2次調査だけでも6,000袋を越えるという。やはり、上記の1つのブロックにおいて、統計学的に意味ある選択を行いながら、水洗選別を進めることが肝要であろう。おそらくその過程において、膨大な数の石鏃の未製品が抽出されるだろう。

(2) ツールの総論から各論へ

本書は、西地区石器群の調査・研究の第一段階の成果の公表を目的とすることから、その内容は総論的にならざるをえなかった。今後は、ツール各種についての研究を深めていきたい。

なお本書では、ツール各種の完成品と未製品・欠損品の問題について、大場正善氏が「第4章1」で検討している。個々の石器が廃棄された原因は、石器の技術的検討によって一定の検証が可能である。また、使用された後に廃棄された可能性のある洞窟部分から出土した石器との比較も行う必要がある。

(3) 西地区に隣接する低湿地を探る

日向地区周辺の大谷地と称する低湿地では、30～40年前まで稲作を行うことは大変な作業であり、長年の客土を重ねて、ようやく現在のような水田になったそうである（山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館佐藤鎮雄館長談）。高畠町内には押出遺跡（縄文時代前期）があり、国指定重要文化財である漆器を含む木製品が出土したことはつとに有名である。したがって、西地区などに隣接するかつての低湿地の下層には、大量の木製品や植物種子などが含まれている可能性がある。こうした意識をもった試掘・発掘調査を蓄積すれば、土器と石器だけで語られてきた縄文時代草創期文化の内容は、大きく様変わりするであろう。

本書の編集に、佐藤鎮雄館長が監修された企画展『旧石器から日向へ』の準備に、佐川も協力した。そこでは土器と石器に加えて、日向洞窟遺跡から出土した動物骨も展示されている（佐藤編2006）。これは松井章氏（独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所・京都大学大学院）の院生である納屋内高史氏が同定されたものである。こうした結果も、槍先形尖頭器と石鏃という狩猟具との関係や、西地区で石鏃が膨大に製作された原因を考える上で、十分参考となる。骨角器の抽出や砥石などの礫器との関係

についても、今後検討する必要がある。

(4) 地域研究の重要性と世界への発信

本書が刊行できたのは、高畠町教育委員会と山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館のご厚情の賜である。佐川自身、地域との結びつきを踏まえた研究の重要性を、これほど認識したことはなかった。

本書の英文要約などを行った山田しょう氏（明治大学校地内遺跡調査会）によれば、外国の研究者も土器の出現期の諸問題について高い関心をもっているという。佐川も、今回判明した石器製作の技術基盤や膨大な石鏃については、東北アジア的にも十分意義あることと認識している。そうした重要な情報は、英文などに翻訳して発信しなければ、対外的に知られることはほとんどない。今後ともその点を意識して活動したい。

さて、50周年を迎えた日向洞窟遺跡の発掘調査は、縄文時代草創期研究の起点であり、研究の牽引を果たしてきた記念碑的遺跡である。高畠町内にある他の縄文時代草創期の洞窟・岩陰を含めて、われわれは山内清男氏や柏倉亮吉氏、加藤稔氏を始めとする大先輩たちの研究を、一層発展させる努力を今後も継続していきたい。

本書の編集に取りかかった2006年3月に、編者である佐川と鈴木氏の共通の恩師である芹沢長介氏が急逝された。芹沢氏も当該期の諸問題を先駆的に追究し、解明してきた。本書を恩師の御仏前に献呈し、長きに渡る学恩に対して心から感謝の意を表したい。

参考文献

佐藤鎮雄編 2006『旧石器から日向へ』（第14回企画展図録）、
山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館